

---

# 異常？過負荷？...どうでもいいです

シェルリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異常？過負荷？…どうでもいいです

### 【Nコード】

N1071BA

### 【作者名】

シエルリア

### 【あらすじ】

なんでも知っていて、なんでも分かっちゃってしまう、そんな異常で過負荷で、でもやっぱり普通の文化委員長の女の子、蕨 小豆。

「別にどうでもいいですが一つ言っておくと

…あんまりしつこいと、バラしますよ？」

そんな小豆が、盲目にも負けず

ただひたすらに異常な毎日を通り過ぎていくだけのお話。

追記：…このお話は私の処女作ですので、

不定期更新、駄文、短文になってしま  
うと思いますが、それでも興味のある  
方は、ぜひ覗いてみてください！

## 作者より

初投稿になります、シエルリアです。

みなさんこんな駄文を

読んでくださってありがとうございます

このお話を書いたきっかけは、

めだかボックスを勉強そっちのけで読んでいて「オリキャラ入れたら楽しそうだな」などと思いついてしまったからです！このお話の主人公は、ちょっと過負荷な、でも思考回路はまともな女の子です。あと、めだかちゃん達の幼馴染です！

とっても駄文になってしまおうと思いますが

次回で主人公の特徴などプロフィールを

紹介しますので、

これからお願いします！！

? 主人公設定?

? 主人公設定?

名前 蕨 小豆くわらび あずき

身長 165cm

体重 45kg

容姿 黒髪セミロング。目は真っ黒で普通に可愛い。と  
いがかキレイ

異常 全知全応ノラストストーリー  
全てを知る事が

できる。ただ、まだあまり制御できておらず知りたくない事も分か  
ってしまうので、小豆はあまり使いたがらない

特徴 盲目。でも、異常のおかげでなんと  
か毎日過ごしている。理事長から許可をもらい、私服登校している。  
本人曰く、「この制服は面倒くさい」

文化委員長。主な仕事は、文化祭の企  
画、運営。学園新聞の発行等。割に忙しいらしい。



## 小豆幼少期ストーリー（前書き）

えっと、これが最初の物語になります！

駄文、誤字脱字が何かと多いと思いますが、

温かい目で最後まで読んでってやってください！

## 小豆幼少期ストーリー

とある異常な<sup>アフノーマル</sup>子供達のための病院の待合室。

ここでわたし、蕨小豆は自分の名前が呼ばれるのを待っていました。それにしても…

「…めんどくさい、なあ」

つい、愚痴をこぼします。

理由は一つ。

毎日、毎日。

毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日  
毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日  
毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日

ずうっと続く、検査のため。

最初、お母さんに連れてきてもらった時は、もっとドキドキしていたはずなんですけどね。

『病院』がなにかは知っていたけれど、それでもこれが終われば、検査が終われば素敵なことがあると信じて、…一年も経ってしまいました。

その間、わたしは一度もここを出れていません。他の子達の中でも

一番先輩です。

時が経ってしまふのってとても早いもので、

お母さんが「また明日来るからね」と言ったものの結局一度も姿を見せず、わたしが（わたし、捨てられたんだな）と分かったのがまるで昨日のことのようです。

それともうひとつ、やっぱりこの空気には未だに慣れません。

薬品の匂いや、きつちりしすぎた生活習慣、子供の泣き声。あと、異常わたしのことを『気持ち悪い』と思っている先生方。

最後のはわたしの異常異常で分かったことですからね、ね。

まあそんな日常はさておき。

なんでも今日は担当の先生が変わるそうです。

わたしの異常アブノーマルによればですけど、前の先生が辞めた理由は「気持ち悪いから」だそうです。

なんとなく次の主治医の先生もすぐ辞めてしまふのかなと思うと楽しみでしかたありません。

「小豆ちゃん！蕨、小豆ちゃん！5番診察室に入ってねー」  
「はい」

ようやく呼ばれましたよ…ったく。

アブノーマル異常を駆使して、やっとのことです番診察室にたどり着きます。

「失礼します」

「あ、こんにちはー！」

…こ、ども？

「…あの。先生が、わたしの新しい…」

「うん、主治医だよ？」

…まじですか。

「わたしの名前は人吉瞳！よろしくね、小豆ちゃん！」

「…はい」

明るい人は、嫌いじゃない。

苦手じゃあるけれども。それに、

どうせこの先生もすぐ辞める。

そんなことを考えていると、何時の間にか診察は始まったようだ。

「それじゃあまず、あなたの異常アブノーマルを教えてください？」

「…先生、知ってるでしょ」

「まあ一応、検査だと思って」

…いいですけど。

「わたしの異常アブノーマルは、『全知全応ラストストーリー』。全部分かつちゃう能力です。一瞬気になっただけで、勝手に分かかってしまう。その人がなにをどう

思っているとか、こうすればどうなるとか、全部。でも、なぜか未  
来だけは分かんないみたい」

「…そう」

「だからわたし、知ってるんです。お母さんはもう帰ってこないこ  
とも、この人はみんな異常わたしたちを気持ち悪がってることも。先生は、  
わたしのことどう思います?」

本気で、この先生も同じだと思ってた。

「そうねえ…」

表面上キレイなことを言っ、結局わたしを気持ち悪いって思っ  
てるって。

だけど、この先生は――――

「大切よ?」

「?」

何を言ったかなんて、どうだっていい。

問題は、何を思ったかってこと。

「…、心から、」

「そう思ってる」

研究のため、とか、そんな邪心の無い、まっすぐな心が伝わって  
くる。

…つね、しい…?

一年ぶりの感情。

胸から熱いものがこみあげて…っ？

「えっ？ど、どうして泣くの？」

「なんでも、…っない、です…」

今日、わたしははじめて愛されました

## 小豆幼少期ストーリー（後書き）

どうでしたでしょうか…

われながら、あまりにも展開が急すぎたかな、と思っています（涙）

感想・意見があれば、ぜひ送ってきてください！

小豆幼少期ストーリー につ！（前書き）

瞳く小豆ちゃん。明日は検査とか何も無いからね

小くなんでですか？

瞳く私が明日休みなのよ

小く…はい

## 小豆幼少期ストーリー にっ！

「やっぱり、暇……」

前回等しく、箱庭総合病院のとある病室。

ここのベッドで上体を起こしながら窓の外を見る少女、小豆は今の状況に思いを馳せていた。

暇すぎて死ぬ……っ！……と。

「これなら、検査があつた方がまだマシですね……」

困った。ここは病院だし、目が目だから迂闊には動けない。この時点でベッド生活は確定してしまっている。ならば異常アブノーマルは？となるのだろうか、あれからどうも様子がおかしい。

……今も昔と変わらず、一瞬でも気になつただけで知れてしまうのは変わらない。

でも、何かが違う。言葉では形容しがたい何かが、変わってしまった気がする。

そう、特に使ったあとの胸のおくの方が……

「……おかしくなつたのですかね……わたしは……」

訳はかんたんだった。

分かっていたのに、分からないふりをしていた。

愛される喜び。

愛されることの素晴らしさ。

それらを知ってしまった小豆にとって、気持ち悪がられることは堪え難い。

知りたくないのだ。

他人が自分をどう思っているかなど。

「だめじゃないですか、わたし……」

ただ。

異常性のないわたしになど、何も残らない。

そう思った瞬間だった。

ガラガラガラッ！

病室の扉が開く。

「むっ？貴様は誰だ？」

「こちらのセリフなんですけど…」

入ってきたのは、どうやら子供のようだった。

「あなたは…」

「黒神めだかだ。めだかちゃんと呼ぶがいい！」

なんと態度の大きい女の子でしょう。…女の子ですよ？

「…、努力します。あと、先輩には敬語を使いましょうね」

「む…そういう貴様こそ誰なのだ」

敬語を…

「…蕨 小豆ですよ。で、あなたはなんなんですか？異常めだかちゃん」

「おお、そうだった。しばらくここに居させてはくれないか？」

「は？」

「暇だったので、探検しておったのだ。…今日は善吉もいないし…」

「善吉？」

「ああ。わたしの友達だ！」

友達のいる異常アフノーマルちゃんか…。

珍しいですね。

「…いいですよ。わたしも、話し相手がいなくて暇でしたし」

「そうなのか？じゃあ、なんで貴様は抜け出さないんだ？暇なのに」  
的を得た質問ですね。

答えてあげましょう。

「目が見えないからですよ。生まれた時からずっと。わたしには何も見えません。そうは見えないでしょう？」

「な……」

「……同情はお断りですよ。そんなことのために話したわけじゃないんですから」

「そう、か……」

……怖気づいたかな？

「……なら、わたしが貴様の目になるろう！」

「……は？」

突然何を。

「わたしが貴様の目になるかわりに、貴様はわたしの友達になってくれ！」

……この子は何を言っている？

「善吉が教えてくれたのだ、わたしは人を幸せにするために生まれてきたのだと！だからわたしは、貴様も幸せにする！そのために、貴様と友達になる必要があるのだ！」

「……わたしはその善吉くんとやらは知りませんが……その子の言ったことは、いささか合っているような気がします。いいですよ、友達

になっても。でも、友達って何をするんですか？」

そういえば、わたしのこれまでの人生に『友達』などという単語は出てこなかったですね。

分かるはずありません。

…最近は、『はじめて』が多いですね…

「わたしにも分からん！なんせ友達は貴様で2人目だからな！そうだな…とりあえず、名前で呼ぶものではないか？互いに」

「？…め、…めだか、ちゃん…？／／／」

「ならわたしは、小豆とでもよばせてもらっぞ」

「…きゅっ」

は…恥ずかしい…／／／

「よし、そうと決まれば遊びに行くぞ！ついてこい！」

「え？え、ちよっと…！！！」

めだかちゃんがわたしの手を引っ張ってベッドから引きずりおろします。

おーい、何も見ずに動くのって、意外と怖いんですよー……って…

「きいやあああああああ！！！」

なんで？なんでお姫様抱っこなんですか？

しかも、体に当たる風の量がやけに多いような…っ？

「はっはっは！さあいくぞ！」

怖い！！！！なんですかこれ！！！！言いようのない恐怖心…そこらの下手なジェットコースターより怖いですよ？知りませんけど！！

「そうだな…中庭にでも行こうか！」

「分かった！！分かりましたから、もつとゆっくり…！！！」  
「む…仕方ないな」

よ…ようやく止まった…久しく運動してないせいで、体力の消耗が激しい…です…カクツ

とまあそんなジョークはさておき。

わたしとめだかちゃんは箱庭総合病院の中庭につきました。

土の匂いや自然の音が、とても懐かしく感じられます。

…いや、本当に懐かしい。

一年ぶりですね、なにもかも。

「さあ、小豆！遊ぶぞー！」

「…はい」

今日、小豆ははじめての友達ができました

小豆幼少期ストーリー につ！（後書き）

—翌日—

善くばく善吉っていうんだよ！！よろしくね、小豆ちゃん！！

小くはい…！よろしくお願いします

めくさあ！！遊ぶぞ貴様たち！

瞳くあら、小豆ちゃんとめだかちゃんは検査よ？

善小めく…！えー？

ようやく高校生だよ…え？性格変わってる？気にしない気にしない！（前書き）

<まもなく離陸いたします。皆様、シートベルトの着用をご確認ください>

小豆く…ぐうzzz

ウィーン…ガタツ！

（飛行機が離陸した音）

小豆くほえ…？っうあぁっ！

ガッターッン？

CAくお客様、あの…

小豆く…っう…ぐすぐす

よーやく高校生だよ…え？性格変わってる？気にしない気にしない！

こんにちは、蕨 小豆です。

さっきまで、飛んでいる飛行機の中でまったりと過去に想いを馳せていました。

今はやっと目的地に着く直前で、荷物の確認や降りる準備をします。

とうとう、帰ってきました。

箱庭です！

さて、どうして冒頭からいきなりこんな事を言っているのか、疑問に思う人もいるでしょう。

そんなわけでちょっとだけ、回想というものをしてみたいと思います。

.....

箱庭総合病院診察室。

小豆と向かい合って座る人吉瞳は、診察が終わるなり唐突にこんな

事を言いだした。

「小豆ちゃんには、明日から大阪に行ってもらおうから」

…はい？

「あの、なんで…」

「あのね、小豆ちゃんみたいに親がいない小さい子…いわゆる孤児は、そういう施設に行かないといけないの。でも箱庭にはもうどこもいっぱいいて、小豆ちゃんを受け入れる余裕がないのね。で、探してみても、ようやく見つかったのが大阪だったの」

…なるほど、ね。

「理屈は分かりました。ていうことは、わたしはもう病院は卒業してことでいいんですよね？」

「うん。そういうことになる。あと、ごめんね…私じゃ、どうにもできなくて」

「…、いいです。じゃあ、もう

行った方がいいですよね」

「めだかちゃんには言わないの？」

あたりまえな質問が飛ぶ。

「わたし、しみりした空気とか苦手なんです。めだかちゃんには、先生から言っといってくれませんか？」

「わかったわ。空港までは送るから」

「…ありがとうございます」

と。

そんなわけで今の私は、空港に着くのがちょっと憂鬱なのです。

人吉先生の余計な配慮により、めだかちゃんと善吉くんが来ることは確定しています。

…ふ、2人の反応が、考えるだけで恐ろしい…！

<まもなく着陸いたします。シートベルトの着用を確認してください>

機内放送が流れる。

それが地獄へのカウントダウンに聞こえた気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1071ba/>

---

異常？過負荷？...どうでもいいです

2012年1月14日04時47分発行